

組織のチカラと人のチカラをバランス良く高めることで、
持続可能な社会づくりへ貢献していきます。

ヤスハラケミカル株式会社
代表取締役社長

安原 慎二

Teiji Yasuhara



多くの情報があふれるネット社会だからこそ、
「情報を読み解くチカラ」が
ますます重要になっています。

2020年にかけて、米中の貿易摩擦や地球環境変化の影響などで世界経済・日本経済の先行きは不透明であると、一般には言われています。しかしそれらはバイアスのかかった情報であることが多く、片側からの情報だけでは実体が見えにくいことに留意しておく必要があります。

例えば米中の問題は、単に関税だけの問題ではなく次のITプラットフォームのイニシアティブをとるための競争という視点でも考えていくべきです。環境問題ではレジ袋削減対策だけではなく、再生可能エネルギーが世界では30%に達するなどエネルギー依存度の変化などにも目を向けるべきです。また新型コロナウイルスの問題では、消費や物流などへの影響ばかりに目が奪われがちですが、需要が先送りされているという視点にたてば、やがて終息した時に需要を取り込む準備をしておくこともできます。

現代はネットなどで得られる情報がますます増えています。だからこそ、片側からだけでなく反対側や別の面からの情報も得る姿勢が求められています。

「情報の共有化」を進めるために 組織の垣根を取り払い 意識を広げる変革を行いました。

ヤスハラケミカルの営業体制は、これまでは市場にあわせて営業一部で樹脂・化成品を取り扱い、営業二部でラミネート・ホットメルト製品を取り扱ってきましたが、このたび一部二部の垣根を取り払い営業組織を一つに統合しました。^(※1)その狙いは、「情報の共有化」です。

ネットで得られる情報はバイアスのかかったものが多いため、一人が得た情報だけで正しい判断をすることがとても難しくなっています。そこで組織の垣根を取り除き、より多くの人が情報を持ち寄り議論することで、判断する精度とスピードを高めたいと考え組織改革を行いました。これにより、一人ひとりが新たな市場や製品への意識や理解を広げ、自分の問題として解決していくことを期待しています。

そして次の需要を予測し発想を柔軟に広げていくことで、より強い組織にしていきたいと考えています。

^(※1) 詳細はP.9 特集Ⅲ「営業組織と研究開発体制の変革」をご参照ください。

「人のチカラ」を最大限に高めるには、 社内での健康意識を高める仕組みづくりも 重要です。

ヤスハラケミカルでは「時間単位の生産性」を高め「新たな付加価値を創造する」きっかけにする「働き方改革」の取り組みを進めています。その一環として、フィジカルとメンタルの両面から健康への意識を高める取り組みも進めています。^(※2)

仕事場で能力を100%発揮して働くには、日頃から健康を意識し体力を高めていくしかありません。それには食事バランスに気をつかうとともに、適度な運動や十分な睡眠

を取るなどして、免疫力を高めることが基本になります。

またメンタル面でも、現代のように社会が複雑化していると、さまざまな場面でストレスを感じたり落ち込んだりする時があります。そうした時に悩みを聞き解消していくシステムも必要です。

こうしてフィジカルとメンタル両面から、社員一人ひとりの健康を会社としてサポートするしくみづくりにも取り組んでおり、それらを進めることが働きがいの向上とともに、仕事の生産性を高めることにもつながると思います。

^(※2) 詳細はP.11 特集Ⅱ「フィジカル・メンタル面での健康への取り組み」をご参照ください。

冷静に客観的に 情報を読み解ける人材を育て、 スピーディーに意志決定のできる 組織づくりをめざします。

ものごとはすべて多方面でつながっており、狭い視点だけでは見えてこないことが多くあります。

情報が見えにくい例として、半導体の需要回復があります。昨年11月頃から中国・韓国・台湾では半導体不況は底を打って上昇に転じていましたが、新型コロナウイルスの影響で需要回復が一時足踏みしていたため、報道される機会はあまり多くはありませんでした。しかし半導体需要がやがて回復することに備えておくことで、回復後はビジネスを有利に進めることができるかもしれません。情報を片側からみて判断していると、肝心の情報を見逃してしまう可能性があることの好例です。

私はヤスハラケミカルを、次の時代に社会が必要とする製品をいち早く供給できる会社になりたいと考えています。それには次の時代が見える人材を育てていくことが大切です。ネット時代の今だからこそ、社員一人ひとりの「情報を読み取るチカラ」を養い、冷静で客観的かつ「スピーディーに意志決定のできる組織」をつくることで、持続可能な社会づくりに貢献できる強い会社にしていきたいと考えています。